

日野オックス 野球ルール勉強会資料

今後、総会や試合前ミーティングなどの場で、野球規則で間違いやすい項目、または実際に試合で起きた曖昧な事例などを取り上げて、チーム内に情報展開していきたいと思います。今回は“ダブルベース”についてまとめました。

1. ダブルベース

【ソフトボール 一般ルール】

1. 打球が白色ベースに触れたときはフェアボール、オレンジベースのみに触れたときはファウルボールである。
2. 打球が内野に打たれたとき、外野に打たれたとき、または、第3ストライクの落球で一塁に走ったときなどで一塁でプレーが行われる場合は、打者走者はオレンジベースに触れなければならない。
3. オレンジベースに触れなかったときは、一塁に触塁したとはみなされず、打者走者が白色ベースに戻る前に守備者にアピール*されればアウトになる。
*アピール：走者の身体または塁に触球の上、審判員に意図を示す。
4. 一塁のオレンジベースを走り抜けたのちの打者走者は、すみやかに白色ベースに帰塁しなければならない。
5. 一塁でプレーが行われなときは、打者走者はどちらのベースに触塁してもよい。
(つまり、長打で一塁でのプレーが無い場合は、白/オレンジどちらのベースを踏んでいてもいい)
6. 打者走者が安打で一塁を回り、二塁をうかがったのちに帰塁するのは白色ベースである。
7. 守備者のプレーヤーは、常に白色ベースを使用しなければならない。

【還暦野球西部連盟特有のルール】

守備側はあくまで白ベースしか認められない。一方で走者側は、危険と判断される状況ではオレンジ/白どちらのベースでもよい。

(ソフトボールでは、一塁上でのクロスプレーで危険があると認められる場合は、守備側、走塁側ともにオレンジ/白どちらのベースでも使用できる特例があるが、西環連では走者にだけ許されていて、守備側は必ず白しか使用できない)

【補足】(ダブルベースとは直接関係ないが) 一塁をオーバーランした走者が、二塁へ進もうという行為を示せば、安全に一塁に戻れる権利はなくなり、触球されればアウト。これはファウルゾーンにいても同じ。

逆に、フェアゾーンにオーバーランしていても、ただちに一塁に帰塁すれば問題ない。

今後、各種妨害(守備、走塁、打撃)、ボーク、テーク1, 2, 3ベース、スリーフィート/ラインアウト、インフィールドフライ/故意落球、・・・などをテーマにまとめて展開していこうと思っています。実際の試合で直面した事例が出てくれば、適宜取り上げたいです。

2. 一塁手と打者走者の接触

【事例状況】内野ゴロを打った打者走者（オックス）がスリーフットライン内を一塁に向かって走っていた。捕球した内野手からの送球が逸れ、それを捕ろうとした一塁手と接触。打者走者は転倒し、タッチされた。このときは“打者走者アウト”の判定だった。（昨年Rリーグの試合であった事例です。ちなみに当該打者走者は顔を打撲した上、眼鏡を損傷しました）

【正解】“打者走者アウト”で妥当

【解説】打球処理時の場合は守備者が優先となるが、この事例は送球に対するプレーなので、守備妨害にはならない。したがって、野手の守備も走者の進塁も同等の権利と解釈され、ナッシング（成り行き）となる。

【補足】ベース近辺ではよく起こるプレー。ただしこれは送球に対する守備者への場合で、打球処理中の守備者に対する場合ならば何があろうとも（スリーフットレーン内でも）守備妨害が取られる。例えば1塁線近辺に上がったフライを取ろうとする一塁手、あるいはその近辺の打球処理に走る投手と接触したならば、たとえスリーフットレーン内を走っていても守備妨害となる。

【関連野球規則項番】 5.09(a)(11)

【スリーフットライン補足】 これは、主に投手/捕手前付近のゴロを一塁送球する時の一塁手守備の妨害を防止するとともに、打者走者の安全地帯を確保するためにあるエリア。例えばエリア外を走っていて、捕手の一塁送球が背中に当たったら、打者走者アウトとなる。逆に、ショートゴロで遊撃手悪送球がエリア外を走っている打者走者に当たっても、これは非該当でアウトではない。なお、打者走者は両足ともにエリア内に入っていないと、エリア内と判断されない。

3. 捕手と打者走者の接触

【状況】送りバントが一塁線側の捕手前ゴロとなった。捕手が捕ろうと前に出たが、打者走者が倒れ、それが邪魔になり捕球できず、ボールはファウルエリアに転がった。このときはそのまま“ファウル”の判定だった。（昨年Kリーグであった事例）

【正解】本来は、“守備妨害で打者アウト”が妥当

【解説】この場合、打者走者は捕手と接触した訳でもなく自ら倒れ込んでおり、これは故意に捕手の守備を妨害し正規の走塁でないといみなされる。

【補足】打球処理中の野手は最優先で、走者側が避ける義務がある。ただし話は少し複雑だが、捕手と打者走者の接触については例外で、規則 6.01(a)(10)【原注】に成り行きになるとされている。したがって上記の事例で、もし仮に捕手と不可抗力的に接触して打者走者が倒れたのであれば、成り行きとなり、ファウルの判定で正しいことになる。

【関連野球規則項番】 6.01(a)(10)【原注】

「捕手が打球を処理しようとしているときに、捕手と一塁へ向かう打者走者とが接触した場合は、守備妨害も走塁妨害もなかったものとみなされ、何も宣告されない」
(推測ですが、この例外規定は、走り出す本塁付近では打者走者が野手を避ける時間的・空間的余裕がないことを配慮したものと思われる) 以上

4. 打者、捕手の妨害関連等

<反則打球>

- ・片足でもバッターボックスから完全に出て打てば（ファウルでも）、ボールデッドとなり打者アウト、走者は戻される。なお、はみ出しているボックスラインを踏んでいるならば問題ない。

<打者による捕手への守備妨害>

- ・バッターボックスを出るなど、何らかの動作で盗塁阻止などの捕手の守備を妨害したと認められたら、打者はアウト、走者は戻される。なお、妨害にもかかわらず走者をアウトにした場合は、走者がそのままアウトとなり、打者の妨害は取り消される。
- ・ただし、本塁を狙っている走者に捕手が触球しようとするのを妨害した場合は、特別に、走者の方をアウト、打者は打直しとなる。類似ケースとして、投手が本盗を防ぐためにプレートを外して捕手に投げた送球を打者が打つなども同様、守備妨害扱い。なお、打者がスクイズバントでボックスから出てバットに当てたなどの反則打球の場合は、その時点で打者アウト、走者は戻される。
- ・打者が空振りしたバットが、故意でなく捕手を妨害してしまったとき、
 - ①その後のプレイに影響なければプレイ続行
 - ②その後のプレイに支障があった場合は、ボールデッドとし、走者を戻すなお、これが故意と認められれば、守備妨害として上記の処置に従う。
- ・盗塁のとき打者が三振して、その打者が捕手の盗塁阻止の送球を妨害したと判断されたら、打者はそのまま三振アウト、対象となる走者も打者の守備妨害のペナルティでアウト。

<捕手による打撃妨害>

- ・スイング中のバットに捕手ミットが当たる例がほとんど。打者に一塁が与えられる。
- ・スクイズや本盗のときの打撃妨害時は、三塁走者の得点を認め、打者に一塁が与えられる。
- ・ただし妨害にもかかわらず打者が打った場合は、審判はすぐにはボールデッドとはせず、プレイの成り行きを見る。進塁については監督による選択権が認められている。例えば以下のケースなど。
 - 妨害を受けて打った打球が、犠牲フライになって得点となった
 - 妨害を受け空振りした投球を捕手が後逸し、走者が生還した、等々

<球審による捕手の送球への妨害>

- ・ボールデッドとなり、走者は戻る。ただし塁上の走者をアウトにした場合はプレイ続行。
- ・捕手から投手への返球も含まれる。

<ーフスイング判定>

- ・ーフスイングで球審がボールと判定した場合、守備側の監督または捕手は球審に「塁審にアドバイスを要請」することが可能。その場合、球審は塁審に確認する義務がある。
- ・逆に、球審が「ストライク」と判定した場合は、攻撃側が「塁審に聞いてくれ」と言うことはできない。（球審が「打者のスイングを確認できた」ということなので、これは最終判定になる）

以上